エイムック 1897

今日からはじめる ベランダ野菜

{ Growing Vegetables on the Balcony }

おいしい野菜が、こんなに簡単。

けっこう食べられる
野菜が作れます

自分の作った野菜で、食卓を豊かに！

マンションのベランダでも
いろんな野菜を栽培できます。
まず、ベビーリーフからチャレンジを！
わずかな土と2週間ほどの時間で、
我が家のベランダ産のサラダが食べられます。

ベビーリーフなら
2週間で収穫

Garden Style Vegetable 02

都会の屋上で笑顔がはじける メリーな野菜づくり

アートディレクター
水谷孝次さん

TEXT:M.KAWAMURA 河村美智香
PHOTO:Y.KUMAHARA 熊原美恵
写真提供:水谷事務所・メリープロジェクト

高層ビルの谷間にあっても、屋上菜園なら日当たり抜群！ 秋には黄金色の稲穂が風に揺れる。

アートディレクターとして活躍する水谷孝次さんだが、昨今では、北京オリンピック開幕式で世界中の子どもたちの笑顔の傘を会場いっぱいに咲かせるなど、社会的な活動でも注目を集めている。

水谷さんが提唱するのは『MERRY PROJECT』というコミュニケーションアート。「あなたにとってMERRY（楽しいこと、幸せなとき、将来の夢など）とは、何ですか？」と問いかけ、世界中の人々の笑顔とメッセージでMERRYの輪を広げようとしている。その一環としてはじめられたのが、オフィスの屋上を農園にするプロジェクトだ。

「きっかけはニューヨークで出席したパーティーの引き出物。真っ赤な箱にグラスと球根が入っていました。それを育てたら真冬に水仙が咲いたんです。東京でずっとデザインの仕事をしてきて、これほど感動したのは数年ぶり！ 感動している自分にも驚いたし、東京で生きることがいかに余韻のない暮らしを送ることか、現実を直視させられました」

可憐な水仙の姿を目にした水谷さんは、以来、オフィスのベランダなどに植物を増やしていくのだが、次第にあることに気づいたという。

「植物が身近にあると、知る・育てる・楽しむという3つの喜びを味わえます。しかもその植物を食べることができれば、まさに自分の生きるエネルギーになる。大切に育てたも

広告業界などで活躍するアートディレクター・水谷孝次さん。社会的な活動メリー・プロジェクトが注目を集める。

水谷事務所スタッフのみなさんと屋上菜園を手助けする西條さん。いつでも笑顔とやさしい雰囲気に包まれているのは、毎日野菜を育てているから!?

4月中旬に植えたミニトマトを6月末には収穫。屋上菜園なら、燦燦と降り注ぐ太陽のおかげでたわわに実るのだ。

キュウリやニガウリなど蔓性の植物を這わせてつくる『緑のカーテンの部屋』。日陰の一角を心地よい風が通り抜けていく。

My small
Balcony Garden Style
わたしの小さな菜園スタイル
style 02 Koji Mizutani

江戸時代から栽培されているトウガラシ。春に植えると夏には実をつける。

スイカの緑のカーテンで夏の日差しを遮る。実もおいしくいただく。

子どもたちのはしゃぐ声が雨雲を遠ざけ、晴天となった梅雨のある一日。自分たちで植えた野菜の収穫に集まった子どもたち。収穫した野菜を前にして、水谷さんと記念撮影。

自分の植えた苗にはメリーな笑顔を添えて。毎日の水やりのたび、この笑顔から元気をもらえそう。

4月に植えた野菜を6月に収穫。採れたて野菜をサラダやピザにして、みんなでいただく。

ここ数年は水田を作りいろいろな品種の稲を育てている。屋上は風が強く稲穂が倒れることも。

ビルの谷間にすくっと伸びる夏の稲穂。黄金色になるとスズメから実を守るのが大変だとか。

木枠で作った一畳サイズの田んぼに子どもたちと一緒に田植え。東京農大の協力のもとで行われ、キレイに植えられた。

実りの秋。酒樽で育てた稲も収穫の時を迎えた。バケツや樽でも稲は育つのだ。

野菜を育てることは創造的!畑の畝だって、僕には現代アートに見える

My small
Balcony Garden Style
わたしの小さな菜園スタイル
style 02 Koji Mizutani

目はレタス、口はバジルで、メリー・プロジェクトのシンボルマークになっている畑も。

のを食べて自分のエネルギーにすることで、人間も自然の一部であると知ることができると感じました」

それからというもの、屋上を借りそこで食べられるものを次々と育てはじめた水谷さん。トマトやレタス、キュウリ、ナス、ゴーヤなどの夏野菜をはじめ、日本に伝わるさまざまな品種の稲や、世界で栽培されている稲、麦なども育てている。

「今では、メリー・プロジェクトの一環として、子どもたちやその親御さんたちと一緒に、この屋上菜園を楽しんでいます。苗を植えて、育てて収穫する。その過程を楽しむことが大切。だから、植える日・雑草を取る日・収穫する日・食べる日など、いろんなイベントDAYを行って楽しんでいます。トマトを収穫したらピザパーティー、田植えをするときにはおにぎりやカレーなど、必ず食べることをともなうようにしています。そうすればご飯を残したりできなくなる。ひいては農業について考えたり、自然環境に興味を持つきっかけになると思うんです。農業を固く考えない。基本的に楽しむことで、続けられる。継続することでこの思いを次の世代に伝えていくことも僕の役目だと考えています」

実際、屋上に上がってみると、東京の空が青く澄んでいることや、冬の寒い日でも、日当たりがよくポカポカしているなど、今まで気づかなかったことを感じることができる。

「鳥や虫もがたくさんやってきますから、せっかく実った野菜や稲をついばまれることもしばしばです。人間よりも動物のほうがおいしいものに敏感なのですね。そういう自然の循環を楽しめるのも屋上菜園の醍醐味です。そうそう、僕自身は天気に敏感になりました。台風が来る前には稲穂が風で倒れないよう保護しなければなりませんから、空気の湿り気具合などを以前よりも意識するようになりました。一日中オフィスで仕事をしていると、肌で感じることを忘れてしまいがち。デザイナーにとって、それはとても怖いことでもあるんです。屋上の畑を見ていて思うのは、農業とはまさに現代アートだということ。畑の畝やダイコンが並んで植えられている様子はポップアートなんです。屋上菜園がもたらしてくれる喜びや副産物は、思いのほか大きいと思いますよ」

農業が衰退していく日本の姿とともに、子どもたちの未来を危惧する水谷さん。どちらの問題も、活性化のポイントは笑顔だと力説する。

「人間が生きる喜びを謳歌するためには笑顔になることが必須。だから、これからの農業は笑顔になる農業であり、農業をして笑顔になることを忘れちゃいけない。僕らはソーシャルデザインとして農業に取り組みたいと思っています。街づくりをするなら、グランドデザインに必ず畑を作ることを盛り込む。これは都会でもできること。そのモデルケースがこの屋上菜園だと思います」

誰でも手軽に行える農業。農業の未来形が都会の屋上にあった。

飲料水のボトルキャップで育てる卓上菜園。約1週間で芽を出し2週間で収穫。まずはここからはじめては?

東京農大准教授・入江先生監修のもと、カラフルなかわいいバケツでも稲を栽培。立派に育った。

全国各地で展開されているメリー・プロジェクト。ぜひ、農業と現代アートの融合を楽しんで!